

「口腔ケア講習会」について — 共通言語の必要性 —

佐藤 保

(社)岩手県歯科医師会 常務理事、医療法人佐藤たもつ歯科医院)

深井編集長

ここ1, 2年に口腔ケア講習の依頼が変化しているのを感じています。以前でしたら、市町村等で行う老人講座や、訪問看護婦養成講座、介護支援専門員新人研修、同現任研修、介護施設研修などが多く、さらに介護施設で口腔ケアチームを作るお手伝いの要請などが幾つかありました。最近は、病院や施設の栄養士、リハ関係者（医師、OT、PTなど）、専門職が多様化してきているように思えます。NST（Nutrition Support Team）等の必要性が言われる中で、必然かもしれません。

介護保険法の見直しにおいて介護予防が重要視され、さらにその介護予防に口腔機能改善が注目されるようになりました。一人の歯科医師としても、県歯科医師会で地域歯科保健を担当する立場としても、歯科医療・保健が介護に有用であることから嬉しい方向なのですが、この潮流が「流行（はやり、ムード）」であればその反動は大きいものとなります。また、専門職のエゴが表面化すれば混乱は大きくなります。過去にその事実がありました。介護保険法施行に当たり、主治医意見書をめぐり「かかりつけ歯科医」の意見書が不採択になった際、採択に向けて努力してきた歯科医師会はその後数年閉塞感に陥りました。中には介護保険には歯科が必要ないのだ、なかったのだとの極論すらあるようです。また、要介護判定に必要なアセスメント方式をめぐり、幾つかの団体がお互い譲らず、結局、一本化できませんでした。歯

科はその議論に影響なかったのも過去の事実です。共通言語で語られないまま介護がスタートした過去から学ぶ時が、今ではないでしょうか。介護予防に向けて、大学関係者、行政の歯科衛生士、歯科医師会の担当者が、厚生労働省における委員会でご尽力していますが、過去から学んだ成果を發揮すべきだと改めて思います。

口腔ケアは、気道感染予防に着目され、現在では口腔機能改善に話が及んでいますが、この2点をイメージとして繋げるあまり両者を同一視することは、科学と異なる方向に進むのではないかと、との危惧を持たざるを得ません。さらに言えば、口腔ケアは障害によって失われた自身のセルフケアを支援する、という本来のかつ根本的なサービスであることの意味を逸脱しかねない危惧の念を持ってしまいます。

「君が何を食べているか言いたまえ、君が何者か言い当ててみせよう。」という有名な句がありますが、平成9年、介護保険施行当時、介護支援専門員指導者であった私はこの句を引用し、「ケアプランを立ててください、貴方の職種が何であるか言い当ててみせます」と言ったことがあります。それほど、当時はケアプランに自らの職種が反映していました。「口腔ケアプランを立ててください、利用者が喜ぶか検討しましょう。」と今は言いたい。必要なプランは、共通言語、すなわち共通アセスメントにより成り立ちます。共通言語の普及が必要だと思うのです。